可能性がある限り、彼らの攻略は終わらない

ぺんたこー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

電子の牢獄アインクラッドに閉じ込められた少年と少女が最前線とは別の場所でまったりゆったりのんびり攻略に挑むお話

気楽に読んでくれれば幸いです。

目次

俺らの出会いはただの偶然 ―― 1
世の中甘くない。それが仮想の世界でも ―― 5
疑う前に信じてみるのもいいかもしれない ―― 10
跡をつけると誤認されるぞ ―― 17

俺らの出会いはただの偶然

俺は今、電子の牢獄に閉じ込められている。全てが始まったあの日から、俺は怖くて宿屋から出られなかった。数日が経ったこの日、ＨＰ（ヒットポイント）が減ることを恐れ回復ポーションを買いに外へ出た時に俺の既成概念は瞬く間に上書きされた。

「おい！お前暇か？」

「……え？」

唐突に投げかけられた言葉に体が止まってしまう。

「お前今なにしてたんだ？」

え？この人はなにを言ってるんだ？この人とは多分初対面だろう。そんな奴に向かってなにをしてたかなんて…

答えない理由がないので一応答えてみる

「あ…宿屋にいました……ずっと…」

「やっぱりな…それで、なぜ外へ出ようと思ったんだ？」

「ＨＰが減るのが怖くて回復ポーションを買いに…」

これは新手のＰＫ（プレイヤーキル）なのではとも思ったが、相手は武器を装備していないし、第１ここ

は圏内だ。防具は着ているがセンスは俺が見ても良いとは言えない。肩から足下まで伸びている紫色のマントは所々破れているが最初からこういうものなのだろう。マントの内側に装備しているのは青いプレートが特徴的なメイル。頭には二本の角の生えた兜を被っている。靴に関してはサンダルのようなものを履いている。例えるならば、まぬけな魔王だ。

「圏外に出なけりゃＨＰなんて減らないし、回復ポーションが必要な時はもうＨＰが減っている。今、買うのは金の無駄だと思うぞ」

確かにそうだ。圏内は安全地帯、攻撃されてもアンチクリミナルコードが働いてノドットもＨＰがへることはない。しかし、回復ポーションの一つや二つ持っていてもいいのでは？

「いいじゃないですか！どうせこのまま死ぬんだから！」

「圏内では死ねないぞ～」

「この世界じゃなくて向こうの世界…現実で、病院のベッドの上で栄養不足で死ぬんですよ！」

俺の反論に返す言葉がないのかファッションセンスはゼロの男は顎に手を当てて何か考えたのち俺に向かって言い放った。

「それもそうだな！じゃぁ、こんな薄汚い宿屋でこもってずにアイテムでも買いに行っ

たらどうだ？」
「いや…あの……だから今、回復ポーションを買いに行こうとしてたところなんですけど？」
　この男は一体なんなんだ？いきなり出てきて金が無駄だの、ここでは死ねないだの、挙げ句の果てにアイテム買いに行けだのなにが言いたいのかさっぱりわからない。
「……そっか、じゃぁ今暇か？」
　何度言ったらわかるんだ？俺は今回復ポーションを買うためにアイテム屋へ行こうと言っているんだ。全く会話が成立しない。
「だからポーションを……」
「そうじゃなくて！」
　ため息まじりに出した言葉は男の声に遮られてしまった。
「お前は回復ポーションを買う以外にすることはないのか？」
「……ありません」
「じゃぁ俺とコンビ組まないか？」
「…え？」
　本当にこの男はなにを言っているんだ。初対面のプレイヤーに向かってコンビを組もうなどと…

「い、嫌です」
「え!?」
　え!?じゃねーよ!こっちが、え?だよ!
「そもそもあなた誰なんですか?」
「え!?名前言ってなかったっけ?」
　男は左手で頭の後ろを掻きながら右手でメニューウィンドを開き可視化モードにして俺に向ける。名前は『ｚｅｒｄｏａ』……ゼルドアかな?
「ゼルドアさん?であってますか?」
「あぁ、さんなんてつけるなよ。ゼルドアでいいぞ」
「それで、ゼルドアはなんで初対面の俺なんかとコンビを組もうと思ったんですか?」
「え!?初対面?俺のこと覚えてないの?」
　何だこの人は…新手の詐欺か?
「いやいやまさか俺が誰だかわかってないの?たこ?」
　たこ…たこ!?こいつ今、たこって言ったのか?
「まさか……奈々?」
「いぇす、あいあーむ」
　そう言ってかなりダサい男いや、重装備の女、奈々はにいっと口角をあげて笑った。

世の中甘くない。それが仮想の世界でも

誤解されないよう最初に言っておく。俺の名前は『ｋｏ―ｔａ』コータだ。故にたこでは無い。俺のことをたこと言ったあの女性は向こうの世界で幼なじみの奈々、この世界では『ｚｅｒｄｏａ』ゼルドアと言う名前だ。

「いや～まさか宿屋に引きこもってるとはねぇ～」

にやにやしながらゼルドアが歩み寄ってくる。兜のせいで声が割れていたのと悪趣味な装備の色からして男だと思ってしまったが、兜を外して見えた顔はどこからどう見ても女だ。

「なんで俺がいるってわかったんだ？始まりの街はこんなに広いのに…」

「なんでって、たまたまだよ？クエストの帰りに道を通っていたらたこがいて話しかけただけ」

偶然か……ってクエストの帰り!?ゼルドアはクエストに行ってたということか？パーティーに入るではなく、コンビを組もうと言っていたからソロなのだろう。

「でもゼルドアはなぜ俺なんかとコンビに？」

「ゼルでいいよ。言いにくいだろ？いや～そろそろソロじゃきついし先頭集団目指すの

は諦めてたところだし、どうせならこの世界を楽しまないとなーって思ってたらたこが出てきたから」

どうしたらこんな考えが出てくるのだろうか。恐怖で始まりの町から出られないプレイヤーが沢山いるはずなのに。少なくとも俺だってその一員だ。っていうか……

「たこって言うなー！」

この際だから言っておこう俺はデスゲーム開始からゼルに出会うまで食料を買いに行く以外に宿屋を出たことがない。つまり圏外にも行っていない。なのでレベルは１のままだ。

まだログアウトボタン消滅に気づいていない時に何匹か雑魚ｍｏｂを倒したくらいだ。武具も町で買える格安のものだしずっと引きこもっていたこの宿屋だって格安だ。

「それで…コンビ組んでどうするの？」

格安宿屋にもたれかかっているダサい魔王いや、女帝は少し悩んでから言った。

「やりたいことは色々あるけど、たこはレベルが低すぎる！まずは経験値稼ぎだろ」

「経験値か……」

「って言っても効率のいい狩場はほとんど狩り尽くされたからな…」

こいつは本当に女なのかと思ったがセンスの良いとは言えない装備をまとったアバターからな発せられる言葉は乱暴だが、声は完全に女のものだ。

「本当は破壊不能オブジェクトを破壊するってのが次にしたい実験だったんだが先に無限モンスターリポップを検証するか！」
「……え？」
「そうと決まったら狩り場へ行こうぜ！」
ゼルは俺の腕を掴んで引っ張って、圏外へと連れて行った。
「具体的に何をするの？」
俺はゼルに連れられて圏外の森の中を歩いている。いつどこから襲ってくるか分からないというのゼルの腰に武器はない。
「経験値稼ぎ」
「どこで？」
「圏外」
「どうやって？」
「モンスターを倒す」
だめだ。全然聞きたいことが聞き出せない。どうすれば聞きだせるのか考えていると急にゼルが止まるので背中にぶつかりそうになった。なんとか踏み止まり、前を見るとそこは森だった。
「着いたぞ」

見渡す限り森だ。森としか表現できないほど森だ。木以外のものが見当たらない。
「じゃぁ、手短に説明するからな」
そう言うとゼルは数歩歩き、メニューウィンドを開いて武器をオブジェクト化した。
それはどう見ても斧だ。
「この先にモンスターが二匹だけポップするところがある。そこでたこはまず、一匹だけを倒す。そんでもう一匹から逃げろ。最初に倒した方がリポップすると同時に二匹目を倒せ。そうしたら　バグって今倒した奴がリポップするはずだ。」
「ちょっと待て！バグるってどういうことだ？」
「リポップすると同時に倒すとシステムがリポップ完了を認識できず処理中の不具合だとみなされ再度処理が行われる。だから圧倒的な時間短縮ができる」
ゼルはウィンドを開くとコンビ申請をしてきたのでＹＥＳを押す。
システムを欺くことなんてことができるのかと思ったが左上に現れたＨＰバーを見て言葉が詰まった。『ｚｅｒｄｏａ』の文字のとなりのレベルは二桁を超えていたのだ。
「じゅ…１２レベ!?」
「おう、この方法で二日間ぶっ続けで狩ってたらいつの間にかこうなってた。まぁ、目標は明後日の朝までに１０レベ越えだな」
ゼルドアは、にししっとわざとらしく笑った。

結果として俺はレベル6まで上がった。結果としては、だ。
結局、システムを欺くことはできなかった。一度はできたことはゼルのレベルが証明している。でも俺がした時にはそんなことはできなかった。ゼル曰く、不具合が運営に見つかってアップデートされたそうだ。
あれから三日間かけて森だの海だのダンジョンだのに籠もりひたすら雑魚モンスターを倒してきた。
ゲームのアップデートをこれほど恨んだのは初めてだ。ゼルは何を考えているのか全く分からないが今回のようにシステムを欺いてみせたんだ。次も奇想天外なことを言い出すのだろう。
そう言えば経験値稼ぎを提案する前に破壊不能オブジェクトを破壊するとか言ってた気がするが多分気のせいだろう。
どうか元の世界へ戻れますように…
俺は夜空のように真っ黒な鉄の天井に願った。

疑う前に信じてみるのもいいかもしれない

「で、今日は何するの？」
　前を歩く女性プレイヤーに言う。
「金稼ぎ」
　お金なら昨日までずっと狩りをして貯めたものがある。それでも足りないくらいというと、どれだけ高いものを買う気なのだろう。
「何買うの？」
「コンビ組んでたとはいえ俺はほぼ何もせずに後ろで見ていただけだ。たこがピンチになったらちょこっと戦っただけだしさぁ」
　そう、コンビを組んで戦っていたのだからコルは分配されるはずだ。それなのになぜ金稼ぎをするのか。
「実質全部たこの金じゃん？」
　そう来たか。何もしていないのに金をもらうのは不公平だと言いたいのか。
「そんなこと気にするなよ。俺がやばかったらすぐ出て来てくれただろ？」
「まぁ、次の実験もしたいしさ」

実験!?まさかここで出てくるとは…しかし何をしようとしているのかさっぱり見当がつかない。黙々と前へ進むゼルドアの背中を追いかける。
「着いたぞ」
またもや急に足を止めるので、今度は背中にぶつかってしまった。鋭く睨まれたが笑ってごまかす。
「ここは……」
目の前には小屋があり、アイテム屋の看板がぶら下がっている。これはどこからどう見ても……
「アイテム屋だ」
「いらっしゃいませー」
店内に入ると女性ＮＰＣ店員の高い声が耳に届いた。店内はそれほど広くなく、２人で入っても狭い。
「なぁゼル。ここでなにするんだ?」
金稼ぎならモンスターを狩りに圏外へ行くのが普通なのに、全く逆の金を消費するアイテム屋へ来ている。疑問が深まりすぎてもう理解が追いつかない。
「ちょっと待っとけ、すぐ終わる」
あれ?普通に買い物に来ただけなのか?でも来る途中で次の実験をするって言って

たし……

「たこもなんか買っといたらどうだ？回復ポーションとかまだ買ってないだろ？」

そういえばそうだ。あの日ポーション目当てで宿屋を出たのになぜかレベル上げに連れていかれたのだ。

アイテム屋には実に多くのアイテムが売っていて、回復系やトラップ系、向こうでも見かける日用品や何に使うのかわからないものなどがある。さすがに１００円ショップには勝てないと思うがそれでもすごい量だ。

中でもわけがわからないのは、店員の斜め前に山のように積まれているものだ。手にとってみるとどうやら布のようだがこんなものいつ使うのだろうか。とりあえず回復ポーションをいくつか買っておく。会計を済ませると後ろにはゼルが並んでいた。

「これをくれ、１００００コル分」

そう言いながら指差したのは、レジカウンターに置かれている布の山だった。俺は心の中で叫ぶしかなかったがゼルは慣れた手つきで会計を済ませる。

「さっ、行こうぜ」

いや、どこに？もう少し詳しく言って欲しい。言っても無だだろうが。

えーっとここは……

宿屋ですね。はい、しかも俺が引きこもってたところ

「よし、じゃぁ始めるか！」
「いや、だから何を？」
今度は口に出てしまった。しかしそろそろ説明してもらわないとやってられない。
「ちょっとした内職だよ」
え？ないしょく？それってあのお家でお仕事するやつ？造花作ったり、ラベルシールはったりするやつ？
「何をするの？」
「下着作る」
え？
いやいや
いまなんて？
「よし、やるか！」
「ちょっと待てー！」
「なんだよ」
「なんだよ、じゃねーよ！なんでそうなるんだよ！っていうかどーやってした……服なんか作るんだよ！ここは現実じゃねーんだぞ？向こうでできてもこっちではできねーよ!!」

言ってしまった。俺の悪い癖だ。一度つっこむとついつい次の言葉が出てきてしまう。これだからリアルでは友達が少なかったのかな…

「あ、その……ごめん」

ゼルはだまってこちらに視線を向けている。数秒の沈黙の後ゼルドアがぷっと吹き、続いて我慢していた笑いを解放して大爆笑し始めた。いや、そんなに笑う?どこが面白かったの?

たっぷり数十秒も笑ってからふーっと一息つくと笑顔で喋りだす。

「いや～久しぶりに聞いたら面白すぎて、たこの愚痴聞くのほんっと久々だわ～」

たぶん今の俺の顔を鏡で見たらリアクションに困るくらいぼーっとしているだろう。そんな俺の顔をスルーしてゼルが説明を始める。

「今回は、ショップで買った物を加工してそれを売って儲ける。って実験なんだけど、よく考えたらこりゃたこには手伝えないな」

「俺だって手先は器用な方だぞ」

「リアルとここじゃ違うって言ったのはどっちだよ」

そういえばそうだ、ここは仮想の世界であり現実ではない。数字がほぼ全てを決めてしまう世界なのだ。

「でも、リアルでは不器用だぞ?むしろこっちの方が器用だと思う。裁縫に限るがな。」

「裁縫に限るって……まさか！」

やっと気がついた。ゼルは裁縫スキルを上げているんだ。おそらく戦闘用スキルと同等かそれ以上に。でもどうしてそんなことまでして金を稼ぎたいのだろう。ゼルのレベルなら第一階層のモンスターなんて何匹来たって無双できるはずだ。そんな考えをしていると分かっているようにゼルはつぶやく。

「圏外に出ずにお金が稼げたら、みんな少しでも希望を持ってくれると思うんだ。まだ怖くて建物からも出て来れない人たちがたくさんいる。たこもちょっと前までそうだったしな。」

にししっと笑うゼルドアを見て妙に胸が締め付けられる気がする。

「まぁ、なんだ。ゲームをクリアして英雄になるのもいいかなって。でも、死にたくはないからさ、安全な攻略法を探してるんだ。もしかしたら無敵コマンドがあるかもしれない。もしかしたら裏ボスがいるかもしれない。隠しルートが、チート級アイテムが……逃げ道があるかもしれない！」

全ての可能性を信じて出た言葉は強い熱を持ち、俺の心の中にとけ込んだ。そうだ、決して諦めてはいけない。少しずつでいいから俺たちも攻略をしていこうと強く心に誓った。

結局、もうけは２００コル程度だった。まぁまぁ集まったじゃないかって？これを聞

いたら驚くぞ。あの日、アイテム屋に布を買いに行った日から２週間、ほぼ全ての時間をつぎ込んでこれだ。まぁ、裁縫スキルが高かったのはゼルだけだったし、布自体もそこまで高くなかったし、何よりゼルのスキル熟練度が低すぎた。この２週間で１５０くらいになったらしいが正直がっかりだ。でも、スキルを取ったばかりでもこれだけ稼げるってことは熟練度と素材のレア度が上がるに連れてもうけも上がっていくのではないだろうか。

もうすぐ第一層ボス攻略会議が行われるらしいので見に行ってみようとゼルに言われた。行きたくないがあの笑顔を見せられたら行かざるをえない。

まだまだゲームは序盤。俺とゼルドアの攻略は終わらない。

跡をつけると誤認されるぞ

第一層のボス攻略会議はかなり遠くから眺めていただけだった。ゼルドアのレベルが知られたら面倒なことになる。それにゼルはボス戦にはいかないようだった。

次の日に第一層は攻略された。犠牲者は1人だったそうだ。

「なぁゼル、今日は何するんだ？」

隣に座る女性に話しかけるが応答がない。下を向いて何か考えているようだった。その横顔からして、多分ボス戦時の犠牲者のことだろう。しばらくは黙っていようと思った矢先、ゼルは言葉を発した。

「行くか」

「どこへ？もっと具体的に言ってっていつも言ってるじゃん」

「情報屋のとこだよ」

情報屋といえば有名な「鼠のアルゴ」のことだろうか。お手製の攻略本を無料配布してくれるすごい人だ。実際には見たことないが、顔は可愛らしくほっぺたにネズミのひげのような3本の線を引いてあるのが特徴の女性プレイヤーだそうだ。売れる情報はなんでも売るがモットーらしく、自分の情報ですらコルさえいただければ売ってしまう

という。とってもいいお値段がするらしいが、だ。
　裏路地に入り何度か曲がって、ようやくついたと思ったらそこにいたのは1人の男だった。
「戦うべきは?」
　その男は俺たちに向かって言った。どんな意味があるのかわからない。だけどゼルはこう返した。
「自分自身」
　それからしばらくの沈黙が続き、情報屋らしき男があごに生えた無精ひげを触りながら笑った。
「久しぶりだなぁゼルドア!」
　さっきのは合言葉か何かだったのだろう急に緊張状態が解けた。
「あぁ、久しぶり、ドロップ。死んでなくて何よりだ。早速で悪いが鼠の場所を教えてくれないか?」
「ん?あぁ、アルゴちゃんか。うーむ今日はどこにいるだろうな〜」
　のんきに伸びをしてからドロップと呼ばれた男はウィンドウを開き、一つのメモを取り出した。
「ほい、これが予想地点だ。今日は全部で38箇所。そのどこかにいる。時間とそいつ

の諸事情から、外れることもあるがな。」
「ありがと。じゃこれ」
今度はゼルがウインドウを開きコルをドロップに送った。額は見えなかったが結構あったのだろう。
「ところでゼル、彼は誰だい？」
「こいつはたこ、リアルでも知り合いのやつだ」
「ちょっと待て、たこじゃない。コータだ！」
「コータくんか。俺はドロップ。情報屋をやってる者だ。情報と言ってもプレイヤーの場所だな」
「プレイヤーの場所って、そんなのわかるんですか？」
「なんとなくだ。ＮＰＣやモンスターとはわけが違う。勘だ。コータくんも誰かの位置が知りたくなったら頼ってみな。４割で当ててやるよ。じゃぁな、俺はもう行く」
ちゃっかり宣伝をして、情報屋ドロップは住宅街の屋根へと姿を消した。
「行くぞ～」
ゼルの声に振り返り後を追った。多分、さっき買った場所の情報を頼りにアルゴを探すのだろう。３８箇所とか言ってた気がするが全て回るつもりなのだろうか。聞いてみる。

「今から全部回るのか？」
　前を歩くゼルは振り向かずに返事をする。
「いや、１箇所で待ち伏せする」
「本当に来るのか？」
「さっきあいつは４割当たると言ったがそれはちょっと間違ってる。来る場所が分かっていても来る時間は分からない。だから４割って言ったんだ。つまり、１箇所でずっといればいつかは通るんだよ」
　なるほど、どういう理屈か。でもそうだとしたら、どうやって位置を調べるのだろうか。この疑問には触れてはいけない気がしたので今はそっとしておこう。
　ゼルが待ち伏せに選んだ場所は第二階層のレストラン街だった。理由は、お腹が空いたからだそうだ。少し早めの夕食を食べて屋根の上に座って待っていると、屋根の上をぴょんぴょんと迷いなく走って行く影が見えた。俺たちはその影を追って走って行ったがさすが鼠と言わんばかりの速さでどんどん距離を離される。
　数分間追いかけ続けると人影は徐々に速度を落としていった。そして俺たちが追いつくと被っていたフードをとり、中から噂通りの可愛らしい顔が現れた。
「まったく…敵襲かと思ったヨ。こんな夜中にどうしたんだい？」
「欲しい情報がある」

「へぇ、なんのだい？」
「ボス戦で死んだプレイヤーについてだ」
鼠のアルゴは黙った。その理由は俺には分からなかったが、きっと売れない情報なのだろう。
「５００コルだヨ」
俺の予想は外れた。ゼルは手際よくウィンドウを開いて支払いを済ました。それと同様に情報屋は、ウィンドウを開いてアイテムを具現化させた。
「毎度あり、そんじゃ、オネーサンはもう行くヨ。これからもごひいきに～」
鼠は夜の闇へと姿を消した。
アルゴから買った情報にはボス戦で戦死した1人のプレイヤーについての情報がびっしりと載っていた。名前、性別、性格、特徴、言葉遣い、装備武器、防具、生存状況まで、ありとあらゆることが載っていた。
ゼルはそれを読み泣いていた。この人は第一層攻略会議で前に立っていた人だ。青い髪が特徴の気持ち的にはナイトをやってる人。こんな序盤で退場してはいけない人だ。
俺にはゼルがなぜ泣いているのか分からなかった。
ただただ時間だけが過ぎていった。

次の日、俺はゼルドアにそれとなく聞いてみた。なぜ泣いていたのかを。ゼルは遠くを見るように顔を上げ呟いた。

「誰だって、死んでしまうのは悲しいよ。それが全く知らない人でもな。」

ゲームをクリアすることができるのか、俺にはまだ分からない。でも、ラスボスを倒した英雄になれなくとも、できることはあると信じていた。

俺たちの攻略は続く。生きている命のために。